

ペン俳句会 句会報(三二五号)

令和二年十二月三日

新型コロナウイルス感染症拡大のため、「メール句会」「オンライン句評会」を実施。
兼題『霜』『走』

大津 そうかい

来し方とベンチに浴ぶる冬日かな

山小屋の主柚子摘む日和かな

寒暁や神の馳走の茜空

検査日の白湯の一杯室の花

霜焼を羞ぢぬし少女傘寿なる

高橋 由紀子

木枯らしや空の犬小屋角の家

熱爛といか飯猫をはべらせて

遠征のマスク野球部寡黙なり

冬晴れや走り終えたる馬の湯気

霜ばしら庭踏み回る小さき靴

宮原 ユリ

ていねいに生きて長風呂十二月

引きこもるコロナで雨で大根煮る

短日や失せもの探す四畳半

ウーバーの夜食環七疾走す

湯に放つ柚子抱き寄せる深夜かな

首藤 しずを

薄き日を花心に冬の薔薇明かし

張りつめし大気きらめく霜の朝

鮭一本いきなり届く年の暮

出走や有馬記念にすべて賭け

傾ぐ陽に男のはたく蒲団かな

中村 晃也

寝静まる牧の牛舎や霜の声

霜枯れや花壇に鏝びし花ばさみ

寒の雷ひそと寄りくる猫を抱く

小走りの孫雑踏の菊花展

菊の香や日はたつぷりと神の庭

志村 良知

銀杏落葉並木は遁走曲(フーガ)奏でつつ

須走の富士のつべりと蕎麦の花

霜菊に羽音の微か陰の揺れ

萬両をざくりと切りて硝子鉢

トンネルを抜けて声上ぐ紅葉山

安藤 晃二

母想ふ霜焼けの手の湯に温し

霜除けに坊さん集う牡丹園

老若や師走モードのATM

叢雲や冬満月の天心に

摩天楼に街路樹に映ゆ冬茜

長尾 進一郎

初霜の輝く朝(あした)靴重し

隅田川師走の街を悠々と

屋外の寒気を纏ひ朝刊紙

冬の日や火の見櫓の向かふ側

軽トラの焼芋匂ふ三丁目

新田 ゆふき

枯色を分けて真白き霜の花

独り行くどんぐり踏みて富士樹海

日向ぼこ半襟解く手忙しげに

冠雪に襷を刻みて富士不動

寄せ返す落ち葉の渚風走る

森田 元斐

初霜の白さに怯む靴の先

宅配と呼び鈴一つ師走の夜

旅立ちの神に念押す縁結び

波を切る鶴翼の陣鴨の声

給食に出るふるさとの菓食ひ

斉藤 まさお

霜除や笠を斜めに鉢の花

足の爪伸びて師走の湯につかる

郵便に混じり木の葉の便りかな

自在鉤に煮物ことこと冬の夜

戻り来し門口ふさぐ落葉かな

今回は、令和三年一月七日（木）です。

兼題は、大津そうかいさん出題の『雑煮』です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

一月の兼題は「雑煮」

季節には春夏秋冬がある。歳時記は春夏秋冬＋新年の五つ季がある。最近の簡易歳時記には新年を冬にいられてあるのも散見する。それは、一年のはじめという感覚が薄まってきているのだろうと思う。今年はコロナウイルス感染予防にあけくれる年であった。密を避ける、マスクは必携、手指消毒、人との交流は避けるなどなど、お正月気分からどんどん遠く新年となる様子である。だからこそ存分にお正月を味わおう。

俳句の季語の物差しは基本として陰暦。陰暦の正月は立春をもとにしているの、本来、新年は春である。初春というのが新年をさすのはその流れであるが、この感性は陰暦、陽暦をも飲み込んでいく。冬の中に新年は別物として存在している。では、新年の最後はというと、二十日正月である。私は神戸の出なのだが、子供の頃は二十日までが正月で門松が立っていた。一月二十日に門松を燃やして、その炭を家の周りに点々と置いて正月の儀礼はすべて終わった。ずいぶん昔のことのように思い出す。

さて、兼題「雑煮」は現代に、しかも生活にすっかり残っているものである。季語としては「雑煮祝ふ」が立つ。雑煮、雑煮膳、雑煮椀は傍題。

揺らげる歯そのまま大事雑煮食ぶ

虚子

何の葉のつぼみなるらむ雑煮汁

犀星

雑煮食うてねむうなりけり勿体な

鬼城

高千穂の麓の宿の雑煮かな

泊月

病院の雑煮が終る三日かな

飛旅子

今年から夫婦つきりの雑煮かな

春鈴

父の座に父あるごとし雑煮椀

春樹

患者診しあとの雑煮となりけり

ひろし

馴染むとは好きになること味噌雑煮

和子

並べてみると、雑煮といえども時代に添って風情や時代を映し出す句として詠まれている。